

Special Report

チームオンコロジーを追う・Part 1

第1回チームオンコロジーワークショップ開催

「リーダーシップ」と「エビデンスの創出」を学ぶ

チーム医療担う医師・看護師・薬剤師が合宿研修

「第1回チームオンコロジーワークショップ」が2～4日の日程で、千葉市クロス・ウェーブ幕張で開かれた。日本のチーム医療を担う医師・看護師・薬剤師それぞれ20人の合計60人が全国から参加しての2泊3日の合宿研修。米国テキサス大MDアンダーソンがんセンターにおけるがん治療のケーススタディーや、チーム医療を支える専門医とコメディカルの役割の検証、さらには臨床試験やがん化学療法などの課題などで、グループワーク形式のディスカッションや実習を行った。MDアンダーソンがんセンターからも、チーム医療のエキスパート11人が来日した。

PROGRAM	
Day 1	10:00 USA Introduction to the M. D. Anderson Team
	10:15 USA Team-Oncology ABC
11/2	10:35 FRI How is a team formed and an oncology program developed?
	11:15 FRI LUNCHEON SESSIONS: Evidence-Based Medicine
11/2	12:05 FRI Ethics in Clinical Practice: Why are clinicians ethical?
	12:15 FRI What is Team BT? Why is it important?
11/2	12:55 FRI What is Leadership in Multidisciplinary Care?
	13:35 FRI What is Leadership in Multidisciplinary Care?
11/2	16:00 FRI Group Work 1 - Physicians (Presenters for EBM: Lee, et al.)
	16:00 FRI Group Work 2 - Nurses (Presenters for EBM: Lee, et al.)
11/2	15:00 FRI The Leadership Role for Physicians and Nursing in Team Formation
	17:30 FRI Group Work 2 - Physicians (Presenters for EBM: Lee, et al.)
11/2	18:05 FRI 5 physicians
	18:05 FRI 5 nurses

3日間に及ぶワークショップでは、日本のチーム医療を担う医師・看護師・薬剤師がそれぞれの立場から意見を述べ合うなど、ワークショップでの成果を肌で感じる様子が見られた。

チームオンコロジーに関する取り組みは、2002年から行われており、これまでも同様の教育プログラムがあった。しかし、今回は日本におけるチーム医療の定着に向け、日本のがん医療を支える若手医療従事者を対象としたチーム医療の教育プログラムにリニューアルした。

特に、第1回となる今回のワークショップでは、チーム医療に求められる「リーダーシップ」と「エビデンスの創出」について学び、科学的なエビデンスに基づく医療の確立に向けた内容をメインとした。

01年広島での癌治療学会でのシンポジウムが発端

そもそもこの教育プログラムの発端は、01年の日本癌治療学会(広島市で開催)で行われた特別シンポジウム「Decision Making for Cancer Treatment: Who and How?」にある。同シンポには、米国有数のがん専

門医療施設であるテキサス大MDアンダーソンがんセンター(以下、MDアンダーソン)から7人、日本側から7人が参加して、活発な意見交換が行われた。

02年からは、日本での教育プログラムに参加した医師・看護師・薬剤師の中から各2人が選ばれ、その翌年にヒューストンで行われるトレーニングプログラムに参加している。



上野氏

過去5年間の国内の教育プログラム受講生は述べ300人を数える。そのうち30人が米国留学を経験し、次に続く若手リーダーの育成のためのチューター役として教育プログラムに参加している。

5年後の日本のがん医療の発展に向けて

新教育プログラムのワークショップの初日には、「チームオンコロジーABC」のコンセプトやチームがいかにつくられ、教育プログラムをどのように役立てるのかや、コミュニケーションスキルの向上など、幅広い視点に基づいたレクチャーが行われた。

MDアンダーソンの准教授でメンターの1人でもある上野直人氏は、「チームオンコロジーABC」と題したレクチャーで、チームオンコロジーの概念やそれぞれのチームの役割分担などを説明した。チームオンコロジーの必要性について、「患者中心の医療を実現するため」「より多くの職種を取り込むため」「ミッションとビジョンを共有化するため」などと説明。あくまでも医療の中心は患者である点を強調した。

また、問題解決に必要なこととして、「1分間、患者の話にだまって耳を傾けることができますか?」と問いかけ、患者の声に耳を傾けることの大切さを指摘した。同時に、患者のことを知ろうとする気持ちも大切であると述べ、患者とコミュニケーションがとれるか否かは医療従事者にかかっていると説いた。

このセミナーでは、「まず自己発見をすること」がテーマの1つとされた。また、「5年後の日本のがん医療を、患者が素晴らしいと思ってくれる医療とする」「がん治療のリーダーとして、これからの5年間でEBMをつくる」といった目標を提示し、その支援としてこのプログラムが存在していると述べた。

同プログラムでの一貫したテーマは「Multidisciplinary(集学的)治療」。医師や看護師、薬剤師といった医療従事者が同じ目線に立ち、患者を中心とした医療の実践を目指している。

メンターによる講義の後、受講者は医師・看護師・薬剤師ごとに別れ、それぞれの職種でのワークショップが開かれた。このワークショップでは、医師や看護師、薬剤師としてのリーダーシップやその役割、そしてチームづくりをどのように行うかという点に焦点が当てられた。

看護師グループでは米国で看護師として働いているメンターが米国と日本との看護師の社会的な地位や教育システム、医療行為の違いなどについて説明。米国の上級看護師は予診や諸検査のオーダー、結果の検討

1st Team Oncology Workshop



を行うことができ、臨床試験専門の看護師は試験内容の説明や患者の同意の取得、実際の運用までを行うことができると紹介した。

集学的治療が一貫したテーマ

また、米国では看護師が専門職として医師と同等の立場で医療に参加している点などが日本との違いとして示された。さらに、自らも乳がんの経験のあるメンターは、自身の化学療法治療時の体験談を交えながら、看護師として何をすべきかという観点でさまざまな意見交換を行った。

研修2日目からは4つのグループに分かれてのグループワークがスタート。各グループに「患者さんの利益を考えた臨床試験を含むオンコロジープログラムをいかに効果的に実施するか」という課題が与えられた。それぞれのグループでは、医師・看護師・薬剤師がそれぞれの立場から

意見を出し、最終日のプレゼンテーションに向けての地道な作業が続けられた。

各職種の視点の違いから、意見が対立するなどの場面もみられ、作業は深夜にまで及んだ。そして最終日、4グループが英語によるプレゼンテーションを行い3日間の研修が終了した。

